

差別の砦を落す

——チャールズ W. チェスナット
の『ヒマラヤ杉の蔭の家』——

安部大成

まえがき

「差別の砦を落す」というテーマのもとに、チャールズ・ワッデル・チェスナットの3部作小説、『ヒマラヤ杉の蔭の家』(1900年)、『伝統の精髓』(1901年)、そして『大佐の夢』(1905年)を検討して、彼がこれらの小説において、何を人種問題解決の起点にしているのかを探し出してみたい。

1880年5月29日、作家を志望していたチェスナットは、その日誌に

「……若し私が実際にもものを書くことになるとしたら、……私の書く目標は黒人よりも白人の心を向上させることに置かれよう。」⁽¹⁾

と記した。22歳に近い日のことである。

1885年、彼は望み通り「アングル・ピーターの家」によって、短篇作家として文学界に出る。この作品において、彼は“奴隷小屋”から解放されたピーターが南部再建期、南部白人の排外にもめげず、一市民として一軒の“家”を建てようと奮闘する、健気な姿を描いて、黒人は白人と平等に、生きる権利、自由である権利、そして幸福を求める権利を生得的に持っていることを読者に明示した。この事を2年前の出来事を念頭に置いて考えてみると、チェスナットの創作の意図はより一層はっきりする。1883年合衆国最高裁判所は1875年に制定された市民権法を違憲であると決め、黒人の市民としての平等権が侵害され

る道を開いていたのである。

彼の目的と願いを踏みにじるかの如く、アメリカにおける黒人差別・排外は時代の推移と共に悪化の一途をたどり、彼の最初の小説『ヒマラヤ杉の蔭の家』が出版された1900年頃には、黒人隔離制度が南部諸州に確立し、大多数の黒人の手から参政権は奪われていった。

しかし、彼は創作の主要目的を一貫して「白人の心を向上させる」ことに置いた。人種差別の原因と責任は白人側にあることを彼は明確に認識していたのである。彼が人種問題の解決を目ざす上で依拠した原理は W. E. B. デュ・ボイスが黒人解放運動の基本とした原理と同じである。

デュ・ボイスは『黒人の魂』(1903年)で言う。

「建国の父の子供らが進んで忘れ去ろうとしている崇高なる言葉：『我々は、すべての人間は平等に造られたこと、人間は造物主によって、一定の奪い難い権利を授けられていること、その権利には、生命、自由および幸福の追求が含まれることを、自明の理として信ずる。』——この言葉をしっかりと胸に抱きしめ、開明的で平和的な、あらゆる手段を使って、天が人間に授けた、⁽²⁾当然受けるべき権利を獲得するために奮闘しなければならない。」

チェスナットは1906年、クリヴランド社会学協会の講演でつぎのように語っている。

「合衆国における人種問題には唯一つの解決法がある。それは黒人の権利を白人のそれと平等に認めることである。……私がここで言う平等とは、そのように、すべての人間が造られた、と独立宣言に言うところのものである。」⁽³⁾
彼はこの解決の道に立ちほだかる、人種差別の観念を人心に築かれた頑迷な砦に喩え、これを文学作品の感化力によって崩壊させようとしたのである。

〔注〕

- (1) Helen M. Chesnutt, *Charles Waddell Chesnutt* (The University of North Carolina Press, 1952), p. 21.
- (2) W. E. Burghardt Du Bois, *The Souls of Black Folk* (A Fawcett Premier Book, 1961), p. 54.

- (3) Sylvia Lyons Render, *Charles W. Chesnutt* (Twayne Publishers, 1980), p. 81.

1

『ヒマラヤ杉の蔭の家』(1900年)は“パッシング”⁽¹⁾という行動と存在形態を生み出すところの社会そのものが持つ差別性を糾明しながら、主として、白人青年ジョージ・トライオンが、その恋人、白人として通る“黒人”女性レナ・ウォールデンに対していただいた愛と彼の心に生起する、根強い差別観念との内的抗争を経て、自らの差別性を克服して行く過程を描いたものである。

この作品に入る前に“パッシング”に対する白人社会の排外とその非合理性を巧みに突いた作品、ケイト・ショパンの短篇「デシリィの赤ん坊」(1894年)を紹介し、“パッシング”に対する白人社会の反応はどんなものなのかを考えてみることにする。

「デシリィの赤ん坊」

ルイジアナ州の名家で大農園主であるオービグニィ家の跡取り、アーマンドはヴァルモンド家の石柱にもたれて立っていたデシリィの姿に魅了される。彼女は生きた彫像のように美しかった。彼女に恋をし、求婚するアーマンドに対して、ヴァルモンド氏には語っておかなければならない事があった。彼女の出生は不明であり、従って父姓もない。18年前、ヴァルモンド家の前にある石柱の蔭に捨てられていた彼女を拾って育てたのである。

この事はアーマンドにとって何の妨げにもならなかった。彼女は栗毛の髪、灰色の瞳、それに、彼よりも色白の美人であり、家名は結婚によって付与出来るものであったから。

アーマンドの父は妻子と共に長い間、パリで暮らした人である。異郷で世界した妻をその地に葬り、アーマンドをつれてルイジアナの農園にもどったとき

アーモンドは9歳の少年であった。女主人のいない、樹の深く茂る大邸宅はほとんど暗い。そこへデシリィは若い女主人として迎えられる。

やがて男の子が生れ、オービグニィ家は一層明るくなる。

子供が生れて4週間だった頃のことである。訪ねて来たデシリィの母は子供に微妙な変化を見て息をのむ。

周囲の様子がおかしいことに、デシリィが気づくのは、子供が3カ月になった頃である。奴隷達の間に謎めいた気配がただよう。遠方からわけもなく人びとが急に訪れて来たりする。そうする間に、夫のアーモンドが妻をさけるようになる。

ある暑い日の午後、赤ん坊は身体をあらわにしたまま寝台に眠っていて、その傍に、半ば裸の混血黒人の男の子が立って扇で赤ん坊をあおいでいる。デシリィは彼女をとりまいて彼女の幸福を脅かしているところの、霧のような謎を解明しようと思案を深めつつ、うつろな瞳を赤ん坊の上に落している。そして何となく瞳を混血黒人の子供に向ける。その瞳は再び赤ん坊にもどる。こうして何気なく反復しているうちに、彼女の眼は光を強め、叫び声が口を突いて出る。

彼女を頑なにさける夫を辛うじて捉え、赤ん坊の身体の奇妙な特徴の謎を問うと、夫は、その子供は白人ではない、従って、お前も白人ではないのだ、と冷たく吐き捨てるように言って、デシリィを忌み嫌うかの如く身を遠ざける。

デシリィは子供をつれて、ヴァルモンド家へ帰される。庭に火葬用の火をたいたアーモンドはデシリィと赤ん坊の持ち物をそこへ投げ込む。二人の身体がふれた寝具も衣服も揺りかごもどンドン焼かれていく。婚約中に彼女が書き送った手紙の束も。そして取り残した1通を火に投ぜんとした彼は、それがデシリィのものでなく、生前、母が父に送ったものを知って開封してみる。そこには母の感謝の気持が書きつけられていた。父は黒人女性と言われる人を妻にしていたのである。

ケイト・ショパンは「デシリィの赤ん坊」で何を提示したのであろうか。

最初、赤ん坊の様子がおかしいのに気づいたのはヴァルモンド夫人である。この時、彼女は赤ん坊に釘づけになっていた眼をすぐ傍にいるデシリィの召使、ザンダリンに向ける。そこには何か似通うものがあった。彼女はそこに間違えば深刻な問題に発展する性質を持ったものがあるのを知ったが、口外しなかった。ヴァルモンド夫人には、それは後で述べることにするが、これを克服しうる信条と情感があったのである。

デシリィが、赤ん坊の特徴が白人のそれとは異なっているのに気づくのは、ラ・ブランチェの男の子と見比べたときである。

ザンダリンは黄色い肌をした女性であり、ラ・ブランチェの子はクォードルン、つまりこの用語の意味通り言えば、 $\frac{1}{4}$ 黒人である。人間の眼は、社会的、慣習的なものの見方に影響されて外界を反映する傾向を持つから、彼女の眼は、この少年の黒人の部分しか映さない。ラ・ブランチェの子は決して $\frac{3}{4}$ 白人としては映らない。それは、この少年が、白人である彼女と同じであるところの人間としては映らないことを意味する。彼がそこにいるのは扇を持った召使いとしているだけではない。奴隷の子、即ち、子供の黒人奴隷としてそこにいるのである。そこにいるのは人の形をした人種なのである。ラ・ブランチェの子は人種関係において彼女には存在するが、人間関係としては存在していない。人種が人間を排除する働きをしている。

デシリィが自分の子供の身体がどことなく黒人に似ている事実気づいて叫び声を上げる。同時にラ・ブランチェの子を追い払う。

「身体中の血液が氷のように冷え、顔はじとじとした湿っぽい汗でぬれるのであった。……我が子に眼をみすえ、恐怖そのものの表情で、彼女は石のように動かなかつた。⁽²⁾」

自分の子供の身体に黒人の身体特徴を見て彼女が覚える戦慄は白人達が創出したところの恐るべき人間奴隷制度の所産である。しかも、この種の戦慄は決して黒人をとらえはしない性質のものである。黒人の人間性を蹂躪し、その

天賦の人権を奪った者達を襲う恐怖なのである。

黒人との血縁関係を嫌悪し、忌避するのは人間本来の性情ではなく、差別制度の所産である。それは差別者が差別のゆえに自分自身をも恐怖するという自己矛盾によって、自己を滅亡に導く性質を持つ。ケイト・ジョバンはその働きを、特に、デシリィと赤ん坊を拒絶した、奴隷所有階級の名家の跡取り、アーマンド・オービグニィにおいて明示したのである。アーマンドは自己を滅亡より救出するには、即ち、自らを火葬用の火の中に投ずるのを阻止するには、自己を人種差別の観念から解き放たなければならない。

デシリィは出生不明の、拾われた、薄幸の子供であったが、
「美しく、心やさしく、愛らしく、そして誠実に育っていった。」⁽³⁾

このデシリィをも、制度化された、いわれなき恐怖は一度は巻き込むのである。

彼女の恐怖の中には、理解し難い出来事に、あるいは不測の事態に直面したときの驚きが濃くまじっているのかも知れない。自分の子が黒人に似ているところがあるという事実は彼女には青天の霹靂であったのだろう。彼女自身、黒人と血を共有する人であったのかも知れない。また夫アーマンドの側がそうなのかも知れない。彼女は養母ヴァルモンド夫人に出した手紙で言う。

「お母さん。皆んなが私を白人ではないと言うのです。どうかお願いですから、それは本当ではないと皆んなに言ってやって下さい。それが本当でないことをお母さんは知っている筈です。私は死にますよ。死なずにはいられません。こんなにも不幸なままでは生きておれません。」⁽⁴⁾

若し返事が来て、彼女が白人である、と言われたら、当然のこと夫の方が白人ではないことになる。しかし、客観的な事実が明白になれば、それはデシリィには克服し難い問題ではなかったのかも知れない。何故なら、最初から彼女は夫と別れる気持など毛頭なく、赤ん坊も愛していて、手離す気持は全くないのだから。

彼女は最終的には夫に家を出され、離縁されることになる。

オービグニ家を追われた彼女は赤ん坊をかかえ、いばらが足を傷つける荒野を横切って、遠いヴァルモンドの大農園へと帰って行く。母からの便りは彼女の身の上について何も触れず、ただ赤ん坊と一緒に帰って来いという内容である。帰路をたどるに際して、デシリィをして、人の行く道を回避せしめたのは、彼女に対する夫の決定と処遇である。デシリィは、白人ではない、従って人ではないと規定されたのである。

アーマンドが、彼女を白人でないとしたのは、彼女が出生不明であるところからであろう。この判断が成り立つためには、彼女が出産した子供の父である彼の側の祖先に、黒人と血縁関係にあった人がかつて存在したことの無いことが明確でなければならない。それを証明することは客観的に不可能である。アメリカは移民の国である。その上、久しく両人種の男女が奴隷制度下において、また自由黒人が多数いて、暮している社会において、自分の側に黒人の血がまじり込んでいる可能性を、考えてみないこと自体、理不尽である。ましてアーマンドはデシリィよりも色が黒いのである。だが、彼にはその様な推理は立てられない。何故なら、それは社会的、慣習的拘束が内面化して、生理的に拒絶される性質のものであるからだ。彼にとって、幸いにも妻は出生不明であった。彼はこれにすがりついて、どうしても彼女を黒人にし立ててオービグニィ家から、子供と一緒に追放しなければならなかった。奴隷制大農園主である彼には黒人との血縁関係は想像するのも恐ろしいことなのである。

ケイト・ショパンはアーマンド自身、黒人の血を引く人であったことを作品の最後で明かすことによって、偏見と差別は、それが制度化されとなおさらのことであるが、他者のそれはもちろん、自分自身の人間性をも踏みこむものであることを効果的に示したのである。

この作品にあるデシリィ、ヴァルモンド夫人、そしてオービグニィ夫人の簡単な手紙のうち、デシリィのを除いた2通は、それ自体作品では展開されないが、重要な意味をもつものである。強いて言えば、この面を発展させたものが、

チェスナットの『ヒマラヤ杉の蔭の家』であろう。

ヴァルモンド夫人はデシリィにつきのよう⁽⁵⁾に書いた。

「私の実の子デシリィへ。ヴァルモンドのおうちへ帰っておいでなさい、愛しているお前のお母さんのところへもどっておいで。お前の赤ちゃんもつれておいで。」

デシリィは彼女が捨てた子であったが、育てるうちに、子供に恵まれなかった自分に、有難くも神がその思召しによって、この子を授けて下さった、と彼女は考えるようになっていた。

出生不明である以上、黒人の血が流れていることもあり得ようし、またそれはアーモンドの方にあるのかも知れないが、神が授けたと信じ切ったヴァルモンド夫人は動揺しなかった。それどころか、こうした事態に直面して、さらに一歩進み出て、デシリィを「私の実の子デシリィ」とした。彼女は一歩深く、デシリィとその子を自分の内側へ引き入れたのである。

アーモンドが開いた亡き母の手紙はどんなものであったのか。

「彼はそれを読んでみた。母は夫の愛に恵まれたことを神に感謝していた。『しかし、そのなかでも』と彼女は書いていた。『彼を深く愛している、その母が奴隷身分の烙印に苦しむ人種の一人であることが、私達の可愛いアーモンドに決して分ることのないよう、二人が人生を歩めるよう、神が御配慮下さったことに、日夜感謝して居ります。』⁽⁶⁾

アーモンドの母は白人に近い身体特徴をした“黒人”であったようである。つまり、白人として通る“黒人”女性であったらしい。奴隷制度下では、白人奴隷主と黒人奴隷の女性の間に性関係があつて、黒人奴隷の男性はそれを阻止することが出来ない状態に置かれていたのだが、奴隷制の早い時期にその間の子孫が出来ていた。ハリエツト B. ストゥは『アンクル・トム的小屋』の「第32章 暗い場所」、「第33章 キャシィ」、「第34章 クォードルンの物語」において、美しい混血黒人の女性が奴隷制度下では白人男性の性的欲望の対象とされ、愛人や妾、あるいは性の慰みものにされてたどる、許し難い、悲しい運命

を描いて制度批判を行っている。ところがアーマンドの父は奴隷制度下の社会的慣習や法的規制を破って、愛する黒人女性と結婚し、正式に妻にしたわけである。周囲の批判的風評と社会的摩擦を避けるべく、長らく国外で暮してもいる。彼が農園主として奴隷制社会の上層部に地位を占めてはいるものの、結婚によって、人種偏見と差別制度との強固な部分に加えた打撃を決して見逃してはならない。差別の壁は人間の主体的行動によってのみ、亀裂を生じ、それは崩壊へと導くことが出来るからである。

〔注〕

- (1) “パッシング”とは白人に極めてよく似た黒人、あるいは白人とそっくりの黒人が、社会的に自己を白人として通す、または本人がそれを意識しないままに白人として通ってしまうことを言う。こうした行動や現象が“パッシング”と規定されて場合によっては深刻な問題と化することがあるのは、アメリカにおいては、白人と黒人との関係が調和した、対等の関係にはないという事実と、アメリカが白人本位の社会を形成しているという実状があるためである。白人社会の大勢は、チェスナットが、1906年、クリヴランド社会学協会でのスピーチでいみじくも語った如く、黒人をアメリカ独立宣言にあるように、平等に受け入れようとしていない*。彼はこれがアメリカの人種問題の原因であると指摘したのであるが、白人社会においては生きる権利、自由である権利、幸福である権利を黒人と平等に享受しようとしないう傾向が強い。こうした社会では黒人と血縁関係にある人を白人として受け入れるよりも、黒人として排斥する社会的慣習は根づよく存続する。“パッシング”は従って白人社会の警戒の対象となる。

ガンナー・ミュルダールによれば

「アメリカにおいては「黒色人種」というものの定義は白人達によって行われる。血管に黒人の血がわずかでも流れている人は——その血がどれだけ遠い過去のものであっても——誰でも黒人の方に分類される。」**

これは排斥のための社会的定義である。彼の著書『アメリカの矛盾』は1944年に出版されたが、当時、南部諸州において黒人隔離制度が実施されており、南部は勿論、これ以外の州において、異人種間結婚を禁止するところがあった。こうしたところでは法律面での黒人定義が当然なされた。最も厳しいところでは、 $\frac{1}{16}$ 黒人の血を有する人は黒人と規定されている。 $\frac{1}{16}$ 黒人とは $\frac{15}{16}$ 白人のことであるから黒人と白人との見分はつかなくなる。そこでは法的定義も『ヒマラヤ杉の蔭の家』で元判事のアーチボルト・ストレイトがレナ・ウォールデンの兄に説明する如く、「一滴

の黒人の血で人は黒人になる。」という社会的定義と同じところに落ち着く。白人と黒人との見分けがつかない人びとの多い国でそれを見分けて排外しようとするところに人種排外主義の非合理性と自己矛盾が露呈されている。

ミュルダールは

「『黒色人種』の定義は生物学的概念ではなくて、社会的にして慣習的なものである。」から「人種という科学的概念は、『人種問題』と認められる事象においては、まさにこの点で、全面的に適用出来ないものである。」***

と述べている。

* Sylvia Lyons Render, *Charles W. Chesnutt* (Twayne Publishers, 1980), p. 81.

** Gunnar Myrdal, *American Dilemma*, Volume I (Pantheon Books, 1962), p. 113.

*** *Ibid.*, p. 115.

(2) Per Seyersted, ed., *The Complete Works of Kate Chopin* (Louisiana State University Press, 1981), pp. 242, 243.

(3) *Ibid.*, p. 240.

(4) *Ibid.*, p. 243.

(5) *Ibid.*, p. 243.

(6) *Ibid.*, pp. 244, 245.

2

『ヒマラヤ杉の蔭の家』は南北戦争数年後の、ノース・カロライナ州とサウス・カロライナ州の仮名の町、ベイツヴィルとクレアレンドンを舞台にしている。

レナ・ウォールデンは白人の父と、肌の色の明るい黒人の母との間に生れた女性で、白人の血を引いているので外観は白人そのものである。白人社会はこの人を、混血白人とは考えないし、いわんや白人とも見なさない。

黒人と血縁関係にある人は、すべて黒人として、白人社会での対等な交渉を差し控えるのである。これは黒人差別の土台の上にアメリカの人種関係が形成されているからである。

彼女の母モウリィは

「ルイジアナ州、または西インド諸島においてはクォードルン、あるいはクレオールとおおまかに呼ばれるが、ノース・カロライナ州では細かい区別をしないので、肌の色の明るいムラト⁽¹⁾と呼ばれる。」

彼女は裕福な白人に愛され、内縁の妻となり、ジョンとレナをもうけた。奴隷制度下であって、彼女は自由黒人ではあったが、人種間結婚が認められていない時期であったから、社会的には、白人の愛人であった。

この白人は制度上、子供に父姓を付与出来なかった。しかし、彼は子供とその母親とに財産を残して死去した。今では老朽化しているにせよペイツヴィルの町はずれに残した、ヒマラヤ杉の木立にかこまれた、書斎のある立派な家はその一つである。彼は混血女性モウリィとその子供達を深く愛した人であった。

レナの兄ジョンは、自分を白人として通すべく、故郷を捨てたまま、行方不明となっていたが、ある夜、突然帰宅して二人を驚かす。

彼が故郷を捨てたのは18歳のときであった。姓名をジョン・ワーウィックと変え、南北戦争の動乱期に農園主の一人娘であった白人女性と結婚、戦後の混乱期に法律家として不動産処理の面で能力を発揮し、有能な弁護士となって、サウス・カロライナ州クレarendon市の白人社会で、ゆるがぬ地位を築いているのであった。

彼は商用があって、10年ぶりに訪れることになった故郷の町を散策しているうちに、家が恋しくなって、抗し切れず、母と妹を訪ねることになったのである。

奴隷制度が廃止されたとはいえ、日は浅い。敗戦の傷跡は政治に、経済に、街の風景に、そして特に、南部人の心に、深く生々しく、その傷跡を残していた。人びとは解放された黒人を平等な人間として扱わないどころか、そのように考えることすらしなかった。

ペイツヴィルの町はずれから、川を隔ててさらに遠くに、赤貧に洗われて傾

く、黒人のあばら屋が立ち並んでいる。この黒人居住地の一角に、母と妹はひっそりと暮していた。

黒人と血縁関係のある人はすべて黒人として白人社会から排外する、人種排外の状況は変わっていない。それはジョンをして故郷を捨てさせ、黒人との血縁関係を隠させる、冷酷な差別なのである。

ジョンは少年の頃、自分は白人だ、と言ったことで、遊び仲間の白人の子供達に制裁を加えられた体験がある。

「5回か6回、打ちのめされて、この事で言い争うことを彼はやめた、決して彼等の言い分を認めはしなかったのだが。遊び仲間は彼を黒人と呼ぶかも知れないが、鏡を見れば、万物の父たる神は、彼を白人として造られたことを証明していた。それだけではない、神は過ちを犯さないと教えられていた彼は——神は彼を白人の姿に造って、白人たらしめんとされたに違いない、と信じたのである。」⁽²⁾

これは南北戦争が始まる数年前の出来事であった。ジョンの住む町にも、奴隷制擁護のために、人種差別主義思想は深く浸透していた。

「黒人の絶望的と言える知的劣等性と、両親によって両人種の悪い部分だけが結合されている混血黒人の体質的、道徳的退化」⁽³⁾

を口実に、黒人は勿論、黒人と血縁関係を持つ人びとは、人種排外の対象となった。それは子供の世界にも影を落していたのである。

ジョンは元判事で、彼の白人の父と親しかった町の法律家、アーチボルト・ストレイトを訪ねて、自分が白人であるのかどうかを問う。ストレイトは法律上の説明をする。

「ノース・カロライナ州では、黒人の祖先から4世代隔たった人までを黒人と定め、人種区分の線を引く、そういう趣旨の判決が行われて来ている。法律の判断を仰ぐなら、お前の件もこれに該当しよう。」⁽⁴⁾

これは法律の問題であるが、社会にあっては、とストレイトは語る。

「お前はね、インクのように真黒なんだよ。わずかな生命の触れ合いで、人

はすっかり同族になる、と詩人も言うが、いつか、どこかで、お前は一人の黒人を祖先にしたのだよ。黒人の血は一滴[※]あっても、それでその人はすっかり黒人になるんだよ。⁽⁵⁾」

ストレイトは彼に北部へ行くか、人種区分の厳しくない州へ移るがいい、と話す。そして、黒人に対するアメリカの規定が如何にひどいものであるか、当時全国的に知られたドレッド＝スコット判決の内容を読んで聞かす。

「つまり、黒人というものはね、『自然の理法上、劣等な段階にあるものであって、社会関係にせよ、政治関係にせよ、白色人種と交際するには全く適しないものである。要するに、彼等は極めて劣等であるから、白人が遵守するところの諸権利を彼等は持っていない。従って黒人は、そのゆえに、公正に、また法律上正当に、奴隷身分におかれるべきである。』とされているのだよ。これは国家の法なのだよ……」⁽⁶⁾

これはジョンに決定的な打撃を与えた。彼はこの国、この社会の掟に抗する覚悟を固め、この法律事務所での雑役のかたわら、法律の知識と業務を身につけ、白人として通すべく、故郷ペイツヴィルから姿を消した。そのとき彼は18歳であった。

妹のレナは18歳の美しい女性に成長していた。しかし、“黒人”として生きる彼女の人生はペイツヴィル白人社会に圧迫される限り可能性の少ないものである。この閉ざされたレナの境遇を見るにしのびず、彼は妹を白人社会に引っぱり込むことになる。彼女はためらう気持を押えつつ、クレarendonの白人社会に入って行った。

彼女は兄の計らいで8カ月ばかり寄宿学校で生活、社会に徐々に慣れていくが、白人として通す行為が破綻する時のことを想像することがよくあって、彼女の神経を圧迫する。彼女は欺瞞を働いているように思えてならない。無事に学校をおえて、兄の家で生活始めるとペイツヴィルへの郷愁と母への思慕に悲しむことが多くなる。彼女は兄の他界した妻に代って、その子アルバートの面倒を見たり、社交界に出入りして、異郷での、白人としての生活を何とか維

持っているうちに、兄の客であり、大農園の若い主人でもあるジョージ・トライオンと知り合うことになる。愛し合う仲となってレナの生活は充実する。それは兄の喜びであった。彼女がトライオンとの関係で、自分の行為、つまり、白人として通していることが急に深刻な問題となって来るのは、愛の告白を受け、求婚されたときからである。彼女にとってこれまで、社会的なものとして受けとめていた“パッシング”という行為がトライオンとの結婚を考えるに及んで、具体的に彼女の個人の責任問題と化して行くのである。

彼女には黒人に関する社会的、慣習的定義に背くことは、一種の犯罪行為のように感じられている。彼女は、白人社会に敵対したりこれを出し抜いたりする考えが皆無であり、“パッシング”に対してすら極めて消極的であり、否定的ですらある。彼女は白人の世界というよりも兄の世界に入って行ったと言っていい程である。

ところが“パッシング”によってトライオンと愛し合う仲となった。それが彼女には一面トライオンに対する欺瞞に思われる。彼はレナが白人としても通る“黒人”であることを知らないでいるのだから。

『『若し彼が私の過去の身の上を知ったとしたら』と彼女は自問する。『それでも彼は真実、私を愛するであろうか？ 彼は私を愛しながら、その上で私のどうしようもない身の上のことで、私を非難し得るだろうか？』』⁽⁷⁾

レナが悩みとするのは、自分に黒人の血が流れていることではない。彼女の悩みは社会的に現存する黒人差別が彼女の恋人をもとらえているのではあるまいか、という危惧からまず生ずる。悩みの原因は彼と差別との関連である。

「彼女は母の家の入口にある広間の書棚にあった幾冊かの小説を読んだことがあったし、また寄宿学校にあったのも読んでいた。彼女は、愛は勝利者であって、生も死も、宗派も身分も、勝ち進む愛の行く手を遮ることは出来ないものであると理解していた。」⁽⁸⁾

そればかりではない。南北戦争の数年前、彼女が三、四歳の子供の頃に他界した白人であった父は人種間結婚を禁止する時代に、混血黒人の母を愛し、内

妻とした。だが、これは数少ない例の一つでもあろう。彼女は愛の力に全面的な信頼を置きつつ、明解な結論に到達する。

「『私を愛する男の人は私そのものを愛するのだと思うわ』と彼女は胸が痛むような思いを込めてつぶやくのだった。『私を本当に愛しているなら、彼は私と結婚する筈だわ。しないのなら、愛していないからよ。私の秘密をジョージに話すことにしましょう。私から去って行くなら、それは私を愛していないからよ。』⁽⁹⁾」

彼女はトライオンの愛の真偽を確かめるために、事実を打ち明ける決意をする。

「だがこの決意ははっきりとした形をとる前に立ち消えてしまった。彼女の身の上の秘密は彼女一人だけのものではなかった。それを明らかにすれば、それは彼女があらゆる恩恵をこうむっているところの、兄の社会での地位に影響を及ぼし、延いては彼女が愛するようになった、幼い甥の将来にも影響を及ぼすのであった。」⁽¹⁰⁾

彼女はこうなると、結婚するか、しないかのいずれかを選ばざるを得ない状態に置かれる。

チェスナットはレナの置かれた苦境を描きながら、彼女をそこに置く“バッシング”なるものは、黒人に平等な権利を認めようとしなない白人社会の差別構造によって生ずることを、また黒人との血縁関係を忌避する社会の冷酷な差別性を、白人にとって極めて身近な存在であるレナ・ウォールデン、黒人と血を共有しながら、白人の姿を取って現われる女性を通じて、白人読者に身近な問題として感受させようとしている。

さて、彼女は結婚しない場合もあり得ることを想定したとき、自らの側の愛の真偽をも問うことになる。彼女はトライオンを愛しているのであり、結婚する意志は明らかなのである。それには、彼女は真実を告げなければならないと判断する。彼を欺瞞する可能性を封じてしまわねばならない。彼女は兄ジョン・ワーウィックに彼女の苦境を訴え、理解を求める。

「『……私は本当のことを彼に知らせずにおいて結婚するのがこわいのよ。結婚後に事実が知れたら、彼は私を捨ててしまうか、愛が消滅するか、いずれかになるかも知れないわ。彼が事実を知らずにいると、万一知れたらどうなるかと私の心配は果てることなく続くのよ。また、仮に彼が知らないうちに私が先に死ぬとしても、彼が知ったときに、彼はどうしただろうか、とそのことが気がかりで、私は死んでも安らぐことはないと思うわ。……』⁽¹¹⁾」

レナの懸念はここでその性質が変ってしまっている。最初のレナの懸念は彼女の“パッシング”が判明したとき、トライオンは、彼女を“黒人”として差別するか、しないかという問題であった。

これはトライオン側にある問題である。彼は「ヴァージニアの乳母」(チェスナット短篇集『若き日の妻、その他、カラー・ラインに関する物語』1899年、収録、以下『若き日の妻』とする。)の白人女性クララ・ホルヘルダーの実母が、混血黒人で家政婦のハーバーであることが判明しても、それが愛の妨げとはならず、彼女と結婚した白人の医者ジョン・ウィンソロップのような人かも知れない。

レナには結果が心配されよう。それは社会に人種差別が現存するからである。差別される側、差別される恐れのある側に、差別の原因はなく、勿論その責任もない。にも拘らず、苦悩を強いられるという、理不尽なものが差別なのである。これをチェスナットはレナの悩みを通して提示する。

さて、レナが兄ジョンに訴えたところの不安と恐れとは、要するに、トライオンに事実を知らさないで結婚することにある。これはレナの側の問題と言ってもよく、彼女の“パッシング”についての見解に由来するところが多い。彼女は“パッシング”を白人社会に対しては、一種の欺瞞行為であると考えている。一方“パッシング”出来ずに、不利な社会条件のなかに残された、混血黒人の母や、他の黒人に対しては、これは私利私欲を求める利己的行為であると感じている。

前者の感じ方は、彼女のものの見方に由来する。彼女をして白屋の見えざる盗人の如く感じさせるのは、彼女が内在化している差別社会のものの見方とこの社会の差別の仕組みによる。

後者は彼女の人間的な情感である。ここから生ずる苦悩は差別と戦う上でも、自意識を変革する上でも貴重なものである。ただし、レナの場合、この面から生ずる罪悪感が、捨象すべき前者の、“パッシング”＝欺瞞という観念に波及してしまふのである。彼女は、かくて“パッシング”を白人社会に対する罪悪と感じてしまふ。それが、結婚に際して、告白を誘うのだ。

ジョンにとって、レナを苦しめているところの問題は、“パッシング”に対する自己の確信が何であるかによって解かれる性質のものである。彼にとって“パッシング”は白人と平等に、社会的、政治的諸権利を享受するための手段であった。黒人との血縁関係を明るみに出さずにおくことによって、白人社会に存在する多くの機会を活用し、それらの権利を享受し得る、と彼は確信していた。従って、“パッシング”によって良心の呵責に苦しむことなどなかった。

彼は白人女性と結婚し、アルバートをもうけたが、結婚に際して、勿論、黒人と血縁関係にあることなど明らかにしてはいない。彼はレナに言う。

「結婚は本人どうしの取り決めであって、それによって夫婦になった二人が、愛し合い、世話し合い、信じ合うところのものである。自分の方から快く忘れてしまいたいと思うことも、他人が知る権利のないことも、同じようにきちんと納めておく、それ自体神聖不可侵の、秘密の小部屋を心に持たぬ人は哀れなものである！ 昔犯した過ちや、時には胸にいただくことのあるとんでもないもの思い、また誰に知られることもない不義の罪や、今さらどうにもならない望みごとや、胸を砕く失望などを人に聞かせて悩ますような、そんな道義的義務など私達にはない。埃にまみれた自分達の祖先の記録を、この秘密の小部屋から持ち出す義務などさらさない。」⁽¹²⁾

レナは美德としての沈黙を守ることになるが、心の不安は消える様子もない。兄はそこで、トライオンの開明性を打診することによって、レナの危惧を解こうとする。トライオンは家系や出生は問わぬとジョンに答える。レナは一歩突込んで問う。

「『若し私があそこにいるあのアルバートの子守りであっても』と彼女は庭

の植込みの間にいる女の子を指さして、彼女の心配事をかくしてしまうような、あだっばい様で尋ねた。『あなたは私を愛しますか?』

『貴女がアルバートの子守りであったら』と彼は愉快に笑って答えるのであった。『1週間もすれば二人は結婚するのだから、その1週間のうちに、⁽¹³⁾別の子守りを雇って来なければならなくなるよ。』

彼女が指さした子守りは明るい肌をした混血黒人の女の子である。

レナの心の悩みは霞が消える如く四散する。そして、病床にある母から密かに届いた手紙に接して、兄に無断で故郷ペイツヴィルへ向う。彼女は結婚する前に一目母を見ておこうとしたのである。彼女がアルバートの子守りの女の子を指さしたとき、彼女は混血黒人女性を意味していた。トライオンには混血黒人女性⁽¹³⁾は心の眼に入らず、子守りの女だけが映っていたのである。

〔注〕

- (1) Charles W. Chesnutt, *The House Behind the Cedars* (The Gregg Press, 1968), p. 155.
- (2) *Ibid.*, pp. 160, 161.
- (3) *Ibid.*, p. 164.
- (4) *Ibid.*, p. 171.
- (5) *Ibid.*, p. 170. ※ここで使われている“血”という言葉は俗的表現であって、遺伝とは全く関係のないものである。社会学書でも便宜的に使われるが、その際には脚注等で説明されている。
- (6) *Ibid.*, pp. 169, 170.
- (7) *Ibid.*, p. 74.
- (8) *Ibid.*, p. 75.
- (9) *Ibid.*, p. 76.
- (10) *Ibid.*, p. 76.
- (11) *Ibid.*, pp. 77, 78.
- (12) *Ibid.*, p. 79.
- (13) *Ibid.*, p. 86.

3

ジョージ・トライオンは彼が愛し、婚約した女性、レナ・ワーウィックが変名の、白人として通していた“黒人”女性であることを発見して驚愕する。

彼の人種に関する社会意識は、彼が親戚の医師グリーンの診療所の一室で読む医学雑誌とこの医師が夕食のテーブルで彼に語る場所に示されている。

「……どれだけ希薄になっても、それはアフリカ人の原型に逆もどりするという黒人の血が持つ特有の傾向があるため、これから先、白人と黒人との間では如何なる形の人種混交も、人種学的に見て不可能である。黒人の血の痕跡はそれがわずかであっても、不可避的に優越人種を劣等人種の水準に引き下げてしまうのであるから。」⁽¹⁾

医学雑誌は科学の名を借りて、根拠のない人種の優劣を論じているが、それが彼には卓越した論議に思われる。

「黒人は劣った被造物である。神は黒人に奴隷の印をつけ、知能を奴隷の状態に合うように調節されているのだよ。」⁽²⁾

医師グリーンは妻と二人の娘を交えたテーブルで公然と語る。この人間差別のドグマに対してトライオンは異論をはさむどころか“優越”人種の再興を期して、一座の人びとと乾杯する。

グリーンとアーチボルト・ストレイトがペイツヴィルに住む混血美人の母親と、恐らく北部へ行って白人で通っているであろうところのその娘の美しさと魅力について熱心に語り合う場に居合わせた彼の心境はつぎのようである。

「その話題は少々退屈であったし、医者が熱中して語っても、全く関心は生じなかった。彼には恐らく如何なる状況においても、有色人の娘などに興味は湧かなかつたであろう、……彼がレナのことを思っているその部屋で、こともあろうに黒人の女の話をするなんて、それは冒瀆にも近いものであった。」⁽³⁾

彼の黒人一般に対する見方や態度はグリーンと同じであるが、彼は黒人を彼の個人的領域に入れて考慮の対象にしたことは一度もなかった。

一、二年前に、ペイツヴィルから姿を消したという、白人と変らぬ混血の美人が町にもどって来ていて、間もなく彼の診療所へ立ち寄るから、まあ一目見ておくがよいとグリーンは舗道近くにトライオンを乗せた馬車を止める。そこへ現われた女性が、クレアレンドンの社交界で知り合った、彼の愛する女性レナ・ワーウィックその人であった。

彼は黒人に対する強い差別観念の持ち主であった。彼女が“バシング”していたことが判明すると

「彼女に対する態度が一転し、愛と思慕は怒りと嫌悪にその場をゆずった。」⁽⁴⁾
すんでのところ、黒人女性と結婚し、“優越”人種・民族たる アングロ＝サクソンを侮辱するところであった、と彼の歪んだ人種感情は嵐のように乱れ狂う。

彼は初恋が不幸な結末を迎えたことを歎き悲しみ、気が動転するので眠りにつけない。レナと決別する決心を固めて、夜明け近くになってやっと眠りに落ちる。

しばしの心のやすらぎを与える眠りの中にレナは現われる。

「若い、色白の美しいレナは彼の眼の前に立っていたが、やがて彼女は、いまわしい魔力のようなもので、徐々に、見るも恐しい、真黒な老婆にその姿を変えて行った。豊かな美しい髪が、薄汚れた布切れで、頭のところどころで結ばれた、つやのない、ちぢれ毛に変わるのを、彼は苦悶にみちた眼で見守っていた。澄んだ瞳が充血して赤くなり、真白な歯が身の毛もよだつ恐しい牙⁽⁵⁾になって行くのを見るのだった。」

トライオンは身ぶるいして、ペイツヴィルのホテルの一室で眼を覚す。彼は自ら持った差別観念の働きによって、自らを脅かすことになってしまった。

彼の愛したレナが白人として通る“黒人”女性であったことは、彼の差別観念の故に彼を驚愕させたことは事実である。だが、ここでチェスナットが、大

切な問題として見逃さない、もう一つの事実がある。それは、トライオンが白人として通る“黒人”女性レナを愛したという事実である。

レナ・ワーウィックにせよ、レナ・ウォールデンにせよ、彼は間違いなく、この女性を彼との人間関係における、深い部分でとらえたのであり、そこには差別社会に規定されるどころの、上下の隔てを持つ人種関係は全く介在していなかったのである。

彼が驚愕したのは、彼の心の奥深いところへ、“黒人”女性が一個の人格として、彼と平等な人間として入っているという事実に対してであって、彼の心は全く新しい体験の前に、ただたじろいでいるにすぎないのである。

チェスナットは言う。

「南部の思考の型は、ヒューマニティに関連する論議を行う場合、そこで到達する結論は、その地域の社会的慣習に合うように調整されない限り、これを黒人に適用することを、承知の上で、あるいは無意識のうちに、常に差し控えるようになっている。⁽⁶⁾」

トライオンを支えて来た、「南部型」のものの考え方、感じ方がレナの前に崩れているのであった。

ここにおいて、愛と正義と自由とをその本質とするヒューマニティと、これとことごとく対立するところの差別とが、白人として通る“黒人”女性レナをめぐる、トライオンの心の中で、その戦いを展開することになる。

黒人が奴隷解放によって得た諸権利を奪い取って、再び白人の支配下に置かんとする「新しい南部」運動の中の保守層出身であるトライオンには、これは容易ならぬ精神的苦闘を強いる。

社会的体面に押される彼は、レナとの関係が察知されるのを恐れてペイツヴィルを逃げるように立ち去る。彼女とこれ以上接することを忌避する彼は、婚約破棄を彼女の兄の方に通告して故郷へ帰る。そこには、かねて彼との結婚を期待されている、金髪で色白の、快活な女性ブランチェ・レアリィが待っている。

だが、ブランチェが彼に与えたものは否定し難い違和感である。それは彼がレナを愛していることに気づかせるばかりである。彼の人種感情と社会意識はレナを排除しようとする。彼はレナが白人として通ろうとした行為は彼に対する欺瞞にみちた、卑劣極まる背信行為であって、彼女との信頼関係は終結させるに足るものと判断する。黒人女性との結婚がもたらす社会的不利益や人種問題をめぐって生ずるかも知れない家庭不和を思えば、事前に婚約を破棄出来たことは喜ばしいことであったとも考えてみる。

「理屈、常識、受けた教育と育った環境がもたらす、直観的な、型にはまった判断——人種差別の制度が支える根深い偏見が、レナを念頭に置くなと強要する。ところが、彼の強固な情愛は頑としてレナを離さない⁽⁷⁾のである。」

チェスナットはレナをめぐって、ヒューマニティと差別との間を大きく揺れ動くトライオンの心を、時の流れを刻みつつ、左右に揺れる時計の振子にたとえている。人間的なるものと、それを否定するところの、非人間的なるものとの対立によって揺れる心は砲火に地面のゆらぐ戦場にたとえられている。人は心を戦場と化するだけの勇気があってこそ、その心を浄化し、向上させるのだが、この内面の抗争が止揚されない限り、トライオンの心に平和は訪れない。

心の葛藤に耐え難くなったトライオンはレナとの関係を修復することによって、苦悩から逃れんとする。

彼はレナに手紙を送り、結婚は出来ないが親しい友人でありたい、と申し出る。

人種差別構造の中で、白人と黒人との間に成立するところの、一見親密とも思われる社会関係は主従関係である。そこには一種の信頼関係が見られるが、それは本質的には幻想である。何故なら、主従関係は黒人の側が一切の権利を放棄し、ひたすら白人の恩恵にすがることによってのみ成立するものだから。これが両人種間の男女の関係において成り立つとしたら、それはどんなものであろうか。

トライオンがレナとの間に求めた友人関係が、どこに行き着くものなのか、それはレナがこれを拒絶することによって明らかにされる。

「そのような友情が万一、成り立つとしたら、あなたが結婚なさろうとしている女性、あなたと二人づれて馬車で学校近くに来られた女性がそれを容認なさらないでしょう。」⁽⁸⁾

トライオンはブランチェを妻にし、レナを愛人にしようという意図はなかったかも知れないが、レナを明確に平等な権利を有する人格として考えない限り、彼にはその意図を否定し去ることは出来まい。愛と差別、友情と差別との妥協は成り立たない。その妥協を求める者が陥る過ちをレナはトライオンに指摘したのである。

レナの拒絶に出会って、彼の内面の抗争は再燃するが、それは新しい様相を呈する。彼のヒューマニティに敵対するところの、彼自身の差別性は愛するところのレナの指弾をうけて弱まりを見せる。それは彼の愛と正義とが接近し始めることにもなる。

「彼はブランチェ・レアリィに妻になるよう頼んではいない事実を思うとき、心の苦悩が軽減するのに気づくのであった。」⁽⁹⁾

レナはトライオンと決別した後、ペイツヴィルを去って黒人学校の教員になるが、その所在地は計らずも彼の農園の近くにある。彼は金銭を与えて口を封じた黒人生徒を仲立ちに、交友を求める手紙を彼女に出したのであるが、それは黒人女性との面会が醜聞めいた噂になるところの社会風潮を恐れてのことである。レナの手紙に接して、社会的偏見の一部から自由になった彼は、直接彼女に会いに行くことになる。ところが、これは彼の予期しない事件へとレナを追い込む結果になる。

レナの就職を世話した学務主事の混血黒人ジェフ・ウェインは彼女に下心があって、人里離れた黒人学校へと彼女を連れ出していた。黒人学校で仲間達の教育に献身することによって、白人として通そうと試みた過去1年の過ちを償い、合わせて心の傷をも癒そうとするレナを苦しめるのが、この彼女の魅力に

とりつかれているジェフである。

下校中のレナにトライオンとジェフが前後から近づく結果となる。二人を避けて木立の茂みに入った彼女は、夕ぐれ時の雨嵐に出会い、道に迷って湿地帯に入り込み、行方不明となる。

救助された家で発病し、高熱にうかされて失跡した彼女は、ペイツヴィルに向う道中、幼少からの友人で、彼女を敬愛している黒人の若者、フランク・フォウラーに助けられて帰郷し、病床に伏すことになる。

愛と正義と自由とが、トライオンのヒューマニティにおいて結合し、彼の内面の差別性を克服するのは彼が失跡したレナを探し求めつつ、ペイツヴィルの道をたどり、レナの死を想定したときであった。

「万一、この若い女性が死亡するとしたら、それは冷酷な仕打をした自分が、この手で彼女を打ちのめして殺したことになる。彼は社会の上位にあることで目がくらみ、自分の名誉にとらわれて分別を失っていたから、無情にも、神がその形に似せて造られた、この汚れなき人間、この美しい女性を、ともに暮して大切にしていた筈の、またこれから先、二人が活着している限り、どんなことがあっても愛し合い、いつくしみ合わねばならない女性を、侮り、傷つけてしまったのだ。障害は事実あったのだ。——それは打ち勝ち難く思われたのだが、愛はそれを乗り越えるだろう。犠牲も払わねばならないだろうが、愛なき人生が無意味だとすれば、⁽¹⁰⁾愛のために世間を捨てたらいいのではないか？」

彼はレナとの結婚を決意して、ペイツヴィルの彼女の家を訪れる。

「日没と夕闇の間際を、疲れた馬の引く、埃まみれの馬車に坐って、一人の旅人が長い橋を渡り、フロント通りを進んで行った。ちょうど馬車がヒマラヤ杉の蔭の家の前に到達したとき、一人の女が戸の握りに喪章をとりつけていた。背の高い、顎ひげのある混血黒人の男が庭の小道をつたって表の門のところへやって来るまで、トライオンは、不安に青ざめて、硬直したように車上に坐っていた。

『どなたか他界なされたのでしょうか？』 トライオンは自分のものとは思えぬ、低い、かれた声で問うた。

『若い黒人の女の子ですよ。』 帽子の端に手をやって、ホーマー・ピティフートは答えた。『モーリィ・ウォールデンさんの娘さんの、レナです。』⁽¹¹⁾

ジョージ・トライオンは悪戦苦闘して、よくその内面の差別に打ち勝ったが、そのとき、彼の恋人はこの世にいなかった。差別される側にある人は、その人の生涯が終らない間に、差別の解消を、少なくともその解消のきざしが見えることを強く願っている。差別されない側、差別する側にある人は差別によって人生の可能性が脅かされる、あるいは封じられるような体験を持たないから、問題の解決が強く迫られているとは感じない。レナを愛することによって、人種差別の問題と深くかかわることになり、悪戦苦闘して自己の持つ差別性を克服し得たトライオンが、悲しいことに、死によってレナを奪われる、という小説の結末によって、チェスナットは差別の解消は、私達の人生において、急を要する死活の問題であることをも示したのである。

〔注〕

- (1) Charles W. Chesnutt, *The House Behind the Cedars* (The Gregg Press, 1968), pp. 105, 106.
- (2) *Ibid.*, p. 136.
- (3) *Ibid.*, p. 113.
- (4) *Ibid.*, p. 142.
- (5) *Ibid.*, pp. 146, 147.
- (6) *Ibid.*, p. 144.
- (7) *Ibid.*, p. 192.
- (8) *Ibid.*, p. 259.
- (9) *Ibid.*, p. 265.
- (10) *Ibid.*, pp. 292, 293.
- (11) *Ibid.*, p. 294.

チェスナットはこの作品において、人種問題の解決には、白人と黒人との間にまず人間関係が成立しなければならぬ、という彼の基本的な観点を形象化した、と言える。

彼が作家としての道を進むことになるのはその処女作「アングル・ピーターの家」(1885年)によってであるが、1880年5月29日の日誌に、彼はつぎのように記した。

「若し私が実際に、ものを書くことになるとしたら、それはある目的、つまり高く尊い目的のために書くことになろう、……私の書く目標は黒人よりもむしろ白人の心を向上させることに置かれよう。何故なら、人間を人種の相異によって、上下に分け隔てする、不正なカスト的風潮がその強い潜行性によって、気づかぬ間に国全体に蔓延し、強い影響を及ぼしている結果、一人種全体とこの人種と血縁的につながりのあるすべての人びとが侮辱され、また社会から締め出されているのが現状であるが——私はこのカスト的風潮を(1)アメリカ人の精神的向上を妨げるところの障壁であると見なすからである。」
彼はここで、カスト的風潮がアメリカ人に人種差別感情を植えつけていることを指摘し、この感情：

「たいていのアメリカ人が共通して持っている、黒人に対する、名状し難い、⁽²⁾とらえどころのない嫌悪感」

を白人の心に築かれた、強固な砦にたとえて言う。

「これは猛攻撃をしかけ、突撃して行って陥落させることの出来るものではない。砦の守備隊は降伏することはない。そこで、砦のすぐ下まで抗道を掘らねばならない。抗道が掘られていることに、彼等の考えが及ばぬうちに、進んで行って、彼等が気づいたときには、私達ももう彼等の間に入っているようにするのだ。」⁽³⁾

彼はここで文学の役割をつぎの如く規定する。

「社会が黒人を社会的に市民として認識し、平等に扱うことになるように、その道を切り開くこと——世間一般の考えを我々の目的としているものに慣れさせること、即ち、人びとを知らず知らずのうちに、それと意識させずに、私達にとって望ましい心の状態へと、徐々に導いて行くのが文学の活動分野である。⁽⁴⁾」

彼は22歳になる数週間前の、若い日にこの日誌を記したのであるが、ここには、後ほど作家として彼がそれを発展させることになる、彼の創作手法の大枠が示されていたと言える。

彼の短篇集『若き日の妻』に収録された作品のうち特に「環境という織物」と「保安官の子供達」には、“白人の心に入り込む”手法がそれぞれ異なった型で使われている。“白人の心”とは勿論、読者の心であって、作中人物である黒人の内面を描くことによって白人読者の心に入り込むことを意図したものが「環境という織物」であり、白人のそれを通して意図したものが「保安官の子供達」であると言えよう。

いずれも人間の心に立ちはだかる、人種の壁が崩れ落ちる過程に力点を置いて書かれた作品である。

「環境という織物」

黒人の鍛冶屋ベン・デヴィスは客のトールントン大佐の馬の鞭を盗んだ容疑が晴れず、無実の罪で服役する。奴隷の解放によって、若い日に自由の身になった彼はその技能を生かしてよく働き十数年後には仕事場と家と妻子を持つ市民になっていた。それは一部の白人の反感を招いた。もともと黒人にとって公正でない裁判である。彼に対する不利な証言が一部白人達によってなされ、彼は懲役5年の刑に服することになる。

勤勉で、真面目で、善良な性格であったベンは、刑期を短縮しようと、自己の潔白を心の支えに、よく働いた。ところが、働き者のベンは当時存在した

コンツイクト・リース
受刑者貸し出し制によって、民間業者に賃貸され、つぎつぎに業者の手に渡って、過酷な労働を強いられることになる。

出所の期間を縮めようとした希望は失われ、絶望がそのあとをしめると、憎悪は容易にベンの心にはびこり、彼の性格はすさんで行く。

「不当に苦しめられている人は高尚な思いに耽ったり、つり合いのとれた考えをしたりはしない。⁽⁵⁾」

彼はトールントンを宿敵と決め、報復を誓う。彼はこの目的を心の支えにして、不当な刑罰を耐え忍ぶようになる。

刑を終えて家路をたどる彼は跛行する身体になっていた。遠い道のりを歩みながら、彼は思うのだった。

「俺が帰って行ったら、皆んなはどうするだろうな？ ナンシーはどうして、この間、家計を支えたんだろう？ 多分、洗濯物を引きうけたんだろうよ。あれは洗濯もアイロンかけも上手だった。俺が刑務所からもどって来ても、子供達は喜んで親父と認めてくれるだろうか？ ビリィのやつは今では大きくなっているだろうな。自分の親父がものを盗むなんて、きっと信じはしまい。家の廻りにかくれていて驚かせてやろう。⁽⁶⁾」

だが、我が家は他人の手に渡り、見知らぬ人が住んでいる。妻子の様子を尋ね歩くと娘は溺死し、息子は白人を狙撃して、リンチ殺害され、妻は若い男と何処かで暮しているというのであった。

彼の復讐心は殺意に変る。彼は計画通りトールントンを狙って、彼の屋敷にしのび入り、表の庭の植込みの蔭に身をかくして、彼を待ち伏せることになる。飲まず食わずで一夜を歩き通して来た彼は、激高と落胆で気力も消耗していた。彼は真昼の庭の片隅で眠りに落ちてしまう。

「眠っているうちに、彼は子供の頃の夢を見た。……また昔の日々の夢も見た。若かった妻、元気のいい子供達の夢。しばらくは、夢は楽しいことばかりであった。

そのうち夢は変って行った。彼は服役者労働収容所にいるのだった。そう

していると、今度は飢えに瘦せこけ、渴きに身を焼く地獄にいるのであった。棘のついた鞭を手に、齒をむいて、彼の前につつ立っていた恐しげな鬼の姿が消え失せると、今度は小さな天使が降りて来て、飲み水を手渡ししてくれるのだった。これを口に運ぼうとすると、手からコップがすべり落ち、彼はあえぐように目覚めるのだった。⁽⁷⁾」

半ば眼をあいて、そのまま横たわっている彼のそばには、一人の幼い白人の女の児がしゃがんでいて、何か片言をつぶやきながら、草花や木の葉を運んで来ては、彼の顔や胸に置き、小さな手でうまく並べているのであった。

「この女の児をじっと見つめているベン・デヴィスの眼には、その眼に似合わぬ優しさが、あふれ広がっているのであった。夢の余韻が残っているためであろうか、さざ波のように巻いている、こがね色の髪の毛は、彼女の周りを明るくして、汚れなき、罪のなき、心のなごみの光輪のように思われるのであった。この児に危害を加えてやれば、彼はその父親をひどく苦しめてやれるのだが、というぼんやりとした考えが、ベンの心に浮んだのは偽りのないところであったが、その影法師のような、暗いもくろみも、それがこの児に向けられると、この児の身体を包んでいる光輪に触れたところで影は薄れて、消えてなくなるのであった。⁽⁸⁾」

馬蹄の響きがして、乗馬姿のトールントン大佐が門を通過して庭に入って来たのは、ちょうどベンが、そんな心のなごみを味わっているときであった。不意をつかれたベンは、とっさに棍棒をにぎって、さっと立ち上ったが、そのとき、復讐のもくろみを支えていた憎悪はその姿を消していた。一瞬その場でたじろいだ彼は、身の安全を求めて、植込みの奥へ逃げ込もうと走り出す。その先には、トールントンの幼な児がいて、草花を摘んでいる。彼はその側を走り抜けんとしていた。

黒人の男が棍棒を手に自分の娘めがけて走って行くのを、馬上から目撃したトールントンはそれが娘を襲う暴漢に映ずる。彼はベンを狙ってピストルを射つ。

「ベン・デヴィスは射たれたまま、数ヤード走ったところでよろめいた。そして両手を投げ出して、この子供の足元に、倒れ込むようにして死んで行った。」⁽⁹⁾

ベン・デヴィスを罪に落とし入れたのは、彼の入所後、その妻ナンシーと同棲した黒人の若者トムである。しかし、この若者の計略は全く子供じみたものであって、容易にベンの容疑が晴れる性質の、仕組まれた窃盗事件なのである。作品では、この単純で、解決のすぐつく種類の出来事が、冤罪と重刑をもたらすところの、警察、司法、行刑制度における人種差別の批判もなされている。しかし、作品の重点は、理不尽な制度によって弊害をうけ、人種憎悪の感情とそれ故に歪んだものの見方をするようになったベンが、人種観念から解き放たれて行く過程に置かれている。

ベンがトールントンを復讐の対象に選ぶのは、白人を個人として存在する人間とは見なくなった証拠である。彼には相手が白色人種であれば誰でもいいのであった。

「彼はいろいろな理由をもとに、彼が黒人全体に加えられた、山積する悪事の体現者であって、不当な仕打をしたのはトールントンという人種である、と信じ込んだ。」⁽¹⁰⁾

トールントンを白い人種と見た彼は、彼自身、黒い人種と化してしまっている。ここではトールントンとベン・デヴィスとの間における人間関係は消え失せてしまい、敵対的な人種関係が、ベンの側から作り出されている。

出所して家路を急ぐ彼は迎えてくれるであろう家族に思いを馳せる。故郷の町で妻子の行先を尋ねて歩く。ベンの世界には黒人の妻子、黒人の隣人達がいる。この世界においては、ベンはもはや「黒い人種」ではない。そこには、互いに平等な人間として認容している人びとの集まりがあって、そこでは、刑務所の壁で隔てられ、虐待され、精神的な孤絶によって断ち切られていた、黒人共同体との人間関係がそのまま回復する。彼がこの黒人共同社会で発見したも

のは、家族の崩壊であった。これはベンをして、この社会から遊離させることになった。町に背を向けて、荒野の道をたどるうちに、彼の人種意識が回帰して来る。冤罪による5年の刑は彼の財産と家族を奪ったのだった。

植込みに身をひそめて、「白い人種」トールントンを待ち伏せするベンは、再び「黒い人種」ベンに逆もどりしている。

彼の夢に幼児の時期が現われるのは、そこには純朴なベンが希求する世界があるからであろう。彼には親族の愛護のもとに、差別にさらされることなく平穩に暮した時期があった。

目覚めた彼の目の前にいる白人の幼児は横たわっている黒人ベンを草花で包んでいる。この差別を知らない幼児の振舞いを見ている彼には、この児は「白い人種」としては映らない。そこには人間の子供がいて、「汚れなさ」と「罪のなさ」と「心のなごみ」を感じさせる。ベンの「黒い人種」意識がこの幼児を通して溶解して行くと、トールントンを「白い人種」と見る意識も消滅してしまう。トールントンが一人の人間として、ベンに何をしたのである。彼は鞭を盗まれた人にすぎない。

彼が馬蹄の響きに驚いて立ち上るのは、理由もなく、他人の庭に入り込んで横たわっている自分に気がついたからである。彼が乗馬姿で間近に迫ったトールントンの顔を認めたとき、そこには一人の人間トールントンを見ていた。

トールントン大佐にとってはベン・デヴィスは一個の人間としては映らず一個の「人種」と映じている。だから、娘の方向へ走って行くベンを人種偏見によって暴漢と判断してベンを射った。しかし、読者には彼は間違いなく一人の人間として映るのである。

この作品には、ベンの裁判で発言する人びとの言葉を借りて、白人の黒人観が描かれてもいる。それは証人、検事、弁護人、陪審員の意見を総括して、求刑するハート裁判官の判決内容に典型的に現われる。

裁判官は手形偽造罪で起訴される白人青年に言う。

「あなたが投機欲にかられて、これはその性質上極めて危険であり、犯罪と

不幸をもたらしやすいものだが、悪の道に入ってしまったのを残念に思う。……あなたの過失はあなただけではなく、名声のある良家の人びとであるあなたの親戚の人びとにも心痛を及ぼし、この人びとはあなたの行為によって、あなたと同じく恥辱をうけている。この人びとの気持を察して、また私も同じ気持でいるから……あなたに郡拘置所における、禁固6カ月の刑を言い渡す。⁽¹¹⁾」

この裁判官と被告との間には、当然のことであろうが、人間としての平等な権利が自明の理として存在している。裁判官はこの被告を対等の人間と考えるから、被告およびその親族、親戚の人びとの立場まで考慮に入れて情状酌量を行うのである。彼は相手が人間であることを自明の理とするから、その相手の立場に自分を置いて、ものを考え、感じてみるのである。

裁判官は窃盗罪で起訴されたベンに言う。

「お前の行為は全く弁解の余地がない。それだけではなく、私は、お前の犯罪はこの種の不法行為に陥りやすいという特有の性向、即ち、お前達黒人が共通して持っている特性の結果であって、この特性は文明を脅かし、さらに、社会そのもの、社会は侵されることのない所有権の基に安定するものであるから、これを脅かすものだと考える。……

……この事件の全般を考えると、見せしめのために、極刑を科すべきである、と確信する。しかしながら、私は法に定める最高の刑期をそのまま科そうという気持はない、……お前には家族があり、またお前の社会での評判も良いことを考慮して、州刑務所における、重労働5年の、軽い刑を言い渡す。⁽¹²⁾」

裁判官は盗みを黒人特有の傾向と見ている。盗みにせよ、殺人にせよ、社会的、人間的に容認し難い行為を、生物学的概念でとらえられているところの人種というものの特徴に帰属させる考えは、人種間には生得的に“優劣”があるという人種差別論に由来する。彼は黒人を、社会的、政治的諸権利を遵守し、享受することの出来ない被造物と見ている。

W. E. B. デュ・ボイスは『黒人の魂』（1903年）で南部白人の黒人観は

「神は人間と家畜との間のどこかの位置に両者いずれにも属さぬ中間物を創造されて、これを黒人と呼べられたのである、と心底からこれを信じて疑わない、強い所信⁽¹³⁾」

を基本として成り立っていると指摘している。

裁判官は彼の人種観によって、ペンを白人と同じ人間とは見なさないが、彼の家族と社会的評判を考慮に入れて、情状酌量を行っている。この配慮は黒人に対する白人の恩恵としてなされているのである。そこには黒人の人権に対する尊重など微塵も見られない。裁判官ハートと被告ペンとの社会関係には、支配・被支配を軸にする人種関係が存在するだけであって、ハートの眼にペンは人間としては反映せず、ただ、「人種」として映ずるのみである。要するに、ハートの側にある人種観念がペンを人間として見ることを妨げているのである。この観念を人種差別観念と言ってもいい。チェスナットはこの人種差別観念が打ち破られる状況の一つの例を「保安官の子供達」で設定している。

「保安官の子供達」

南北戦争10年後のことである。トロイという平穏な南部の田舎町で、ウォーカー大尉が何者かに殺害される。検視の役人に対し、見慣れぬ混血黒人の若者がウォーカーの家に近づくのを見たとか、町を出るのを見たと告げる人達があり、民衆の手で捜索が開始される。

夕方、この若い黒人は捕えられ、郡拘留所に収監される。彼はウォーカーの衣服を盗み取っていた。殺人犯は別にいたが、被害者の衣服を所持していたことの外に、彼が黒人であることが白人の間に反感と強い疑念を生じさせ、彼は殺人犯に仕立てられてしまう。

殺されたウォーカーはメキシコ戦争に従軍、南北戦争ではゲッティスバーグの戦いで奮戦し、片腕を失った人である。この白人の英雄を黒人が殺したというデマは近辺の町にも広がり、黒人に対する反感は高まる。この種の容疑者に

裁判は丁重に過ぎる、民衆の手で処刑しよう、と主張する者達が集まってリンチ殺害の計画が立てられる。夜、暴徒は町に集結し、黒人の身柄引き渡しを要求して拘置所に押しかけて来る。

保安官キャンプベルは別名キャンプベル大佐とも呼ばれ、これも南軍で功績のあった人である。軍人としても、また保安官としても、その任務に忠実であり、責任を重んずる彼は暴徒の要求を受け付けない。

彼は拘置所内に立てこもり、襲撃して来る暴徒に抗戦することになる。暴徒が建物の周辺から引き退って、拘置所を遠巻にし、戦いが小休止したとき、保安官はふとした油断で、この黒人の青年にピストルを奪われ、生命が脅かされる。

銃口を突きつける青年と押問答するうちに、この黒人の若者はキャンプベルが、かつて奴隷所有主であった頃に、奴隷の女性にはらませた子供、トムであることが分る。キャンプベルは経済不況のとき、この女性を子供付きで奴隷商人に売り渡したのである。彼の白人の妻は今は他界しているが、一人娘ポーリーを残した。娘と二人で暮して来た彼は、黒人女性の生んだ子供のことはすっかり忘れ去っていたのである。

トムは裁判によって殺人容疑を晴らすことは不可能であり、処刑されることは明らかであるから、脱走をもくろんだのである。彼の身柄を守って暴徒と対決する保安官が、母を売却した実父であることが、トムの心境を複雑にする。保安官を残して脱走すれば、必ず通報され、追跡される身になろう。そこで、昔の恨みも湧く中で、トムはいっそのこと実父キャンプベルを射殺してしまおうとする。彼が狙いを定めたとき、気づかれずに拘置所内に入って来ていた保安官の娘ポーリーによって、彼は背後から射たれる。彼女は射って重傷を負わせた混血黒人の若者が、半ば血を分けた兄であるとは知るすべもない。

応急手当をほどこし、翌朝、医者と呼ぶことにした保安官は未決拘置者トムの身柄を独房に収容し、拘置所のそばにある自宅にもどる。暴徒は町を引き上げてしまって、夜は静寂そのものである。危く死をまぬがれた彼は、謙虚に反省する心境になっていた。奴隷制下とはいえ、黒人の若い母とその子供に行っ

た仕打は、人間として許されないことであった。彼女は売却先で、身体を守ろうと抵抗したため、酷使されて死亡し、子供は奴隷解放の日を迎えたが、依然として存続する人種差別と排外によって生活に困窮し、盗みをせざるを得なくなっている。

彼は深く責任を感じ、法廷でこの拘置者の殺人容疑を晴らし、釈放されるよう尽力することによって、責任の一部を取り、釈放後は息子トムに対して犯した罪を、人間に対して犯した罪を、神に対して犯した罪を償おうと決意する。

翌朝、拘置所へ行き、トムの独房へ入ってみると彼は冷たくなっている。彼は社会と自己の境遇に絶望したのか、包帯をほどき、傷口を開いて失血し、自ら生命を断っていたのである。

キャンプベルは収監している容疑者が黒人であることから、この若者がウォーカーを殺した犯人である、と判断してしまっている。彼が暴徒の手にこの黒人を引き渡さなかったのは、その人権を考慮に入れたからではない。

「キャンプベル……は自分の役目に伴う責任を強く感じていた。彼は保安官としての義務を果たすことを誠実な心で宣誓し、この仕事についたのであった、そしてさらに彼は保安官の義務とは何かを、これまで他の職についていたときに理解していたよりも、一層明確に知っていた。⁽¹⁴⁾」

彼は任務を遂行することだけが目的であって、その行為は正しい。キャンプベルとトムとの関係は保安官と拘置者との関係、即ち役割を軸にした社会関係があって、これは厳正に維持されねばならない。

しかし、見落してはならないのは、この社会関係において、夫々その地位を占めているのは人間なのであって、そこには正当な人間関係、即ち相互の人権、なかでも身体的自由をある程度拘束される地位に置かれる人の人権が充分保障されているのが前提である。役割関係の基本の一つとして、その非人格性が強調されるのは、地位を占める人間の私情が役目の遂行を妨げるのを防ぐことにある。従って、役割関係の土台として当然存在すべき、人権を基本とする人間

関係と排除されるべき私的関係とは明確に区別されねばならない。

さて、キャンプベルは拘置所を取り囲んだ暴徒に言う。

『お前さん達、話をしても無駄なんだよ。』と保安官は応ずるのだった。
『この拘置所の外側では、私は白人だが、内側では私は保安官なんだぜ。』⁽¹⁵⁾

市民としては、白人と黒人とを上・下に分け隔てする人種関係を守って人に対応するが、保安官としてはこの人種関係には拘束されないことをキャンプベルは明言出来る人物である。それはベンを人種関係においてとらえ、裁判官としての役割まで放棄してはばからないハートに比べると彼は人種差別から自らを解き放つ可能性を十分に持っている人なのである。人種を上・下に分け隔てする観念を保安官としても市民としても克服するには何が必要なのか、如何なる体験が必要なのか。

キャンプベルは拘置所の外と内とで自己を分けて行為するが、拘置者が黒人である以上、キャンプベルが市民として、また人間として人種差別の観念を持つ限り、この拘置者に偏見と予断を持つことになる。

彼はこの男が黒人であるがゆえに、ウォーカー殺害犯であると決めてかかっている。だから、彼の任務はこの黒人殺人犯の身柄を安全に保護して、裁判に付することでもある。

暴徒に取り囲まれた拘置所の監房内で、怯え切っている黒人の若者に彼は言う。

『立て！』と彼は鋭い調子で言った。『遅かれ、早かれ、お前は多分、絞首刑になろう。だが、私が暴徒がお前の身柄を奪い取るのを防ぐことが出来たら、今日首を刎られることはあるまい。』⁽¹⁶⁾

役割に伴う任務の遂行は、彼が生きていてこそ為しうるものである。暴徒は彼の任務を破壊しようとしているだけではない。彼等は保安官の役割を演じ切ろうとする、人間キャンプベルの生命を奪わんともしているのである。死の危機は保安官と拘置者の地位を越えて、二人の人間に平等に迫って来ているのである。

保安官キャプベルはトムに言う。

「お前の足かせの鍵ははずしてやるから、私が拘置所を守り切れなかったら、お前が全力を尽して抗戦するのだ。私が射たれて死んだら、私の責任はそれで終わったものと考えているのだ。」⁽¹⁷⁾

外部を敵に廻し、役割の防衛が生命の防衛にまで発展するなかで、保安官と拘置者の間には、その社会関係と並んで、人種関係を排除した、純然たる人間関係が現われて来るのである。

トムは捕えられて間もなく、保安官キャンプベルが実の親であることを知った筈であるが、彼はこの事実を明らかにする意志はなかった様子である。彼が血縁上、父と子の関係にあることを暴露したのは、ピストルを奪って脱走を試みる彼を忘恩の徒として非難する保安官に応報する必要上、そうしたのである。

確かにキャンプベルは保安官の役割を越えて、人間として取るべき最善の行動をした。この保安官にピストルを突きつけて釈放を要求するのは、人間として正しいことではない、と彼は言う。

トムにとって拘置所に留ることは、犯していない殺人のとがで、暴徒に首を吊られるか、法廷に出され、差別裁判によって絞首刑に処せられるか、のいずれかであって、彼は夜の闇にまぎれて脱出する以外に生命を守ることが出来ないのである。彼は人間として非道である、と言う保安官の非難に対して、父たるキャンプベルは子たるトムに何を行ったのか、と反論したのである。

キャプベルには白人の妻と娘があった。しかし、黒人女性に愛着を持って、この女性を愛人にし、子供をもうけていた。この黒人の女性と子供のトムを奴隷商人に売却し、忘れ去っているのは、人間として非道であろう、と彼の非難に応じたのである。

ピストルを中立にした二人の応報は、拘置を強制しようとする者とこれを拒絶する者との対立を越えてしまっている。そこには、白人の父と混血の息子を結ぶ人間の絆がある。

キャンプベルは人種関係を捨象して、役割関係に徹しようとした。これを暴徒が許さず、役割の遂行が脅かされると、彼は役割の枠の外に出て、人間として行為した。この行為が白人キャンプベルと黒人トムとを、相互に人間として緊密に結びつけることになったのである。

父たる保安官の生命を奪うことを避けようとするトムは、脱走事件を朝まで通報しないでおく、という約束を取り付けようとするが、かつて母と自分を奴隷商人の手に渡した父でもある。彼は父たる保安官が信頼出来ない。そこで彼は保安官を射とうとピストルを構える。

保安官キャンプベルは恐らく、ここで射たれて死んでいただろう、若しトムに強制されて、拘置所の扉の鍵をはずしていなかったら。暴徒との射ち合いがあった後、静まり返ってしまった拘置所の様子が変わる感じたキャンプベルの娘ポーリィは、この扉を押して中に入ることが出来たのである。彼女は父にピストルを向けている男を背後から射った。彼女はこの混血黒人の若者が、父の実子であり、彼女の兄であることを全く知らないでいるからこそ、警告なしに、背後から、ためらうことなく射てたのである。キャンプベルは息子トムに強制されて鍵を開けたこと、娘ポーリィが兄を射ったことによってその生命を救われたのであった。

「夜が静かに見守るなかで、神と共に唯一人である、これまでに思いも及ばなかったことが、彼の心に立ち現われて来るのであった。一、二時間前、死に直面したままでいたとき、彼は水に溺れている人が感じると言われる、心身の興奮とよく似たもの——一種の精神の清澄作用なるもの……——神に見られているが如く、嘘偽りなく、あるがままに自分を見る、そのような心の状態を体験した。」⁽¹⁸⁾

彼は自分をトムの立場において、そこに加えられる人種差別の冷酷さを認識すると共に、彼が為さねばならない社会的義務、取らねばならぬ、社会的責任を感ずるようになる。

彼が明け方近くまで、深くもの思いに耽り、その責任と義務を自覚する頃、

重傷を負ったトムは自らの手で生命を断っている。彼は保安官を射たざるを得ない状況に置かれ、それによって逆に重傷と新たな罪を負う。ここに至って、トムは法律上の罪も心身にうける傷も差別される側に一方的に生じるという現実には悲観したのであろう。チェスナットは、差別する側、差別されない側にある人びとにとって、道義の問題であるところの人種問題は、差別される側にあるとは、死活の問題であって、この点を見落してはならないことを、トムの死によって明確にしているのである。

差別観念から解放放たれている白人は、どのような関係で、黒人と交わるのであろうか。チェスナットは「シセリィの夢」で、白人女性マーサ・チャンドラーと黒人女性シセリィ・グリーンとの関係に、兩人種間の人間的な交わりの一つを想定している。

「互いに覚えた共感であったから、マーサは、二人の間にある人種的特徴の相異にも拘らず、二人を結びつける、一種の友愛的理解に似た情感が、そこにあるのに気づくのであった。マーサは人が不可能ごとに思いを馳せるときのように、そこはかたなく思うのであった——若し彼女が茶色い肌で生れ、ノース・カロライナ州で育っていたら、彼女はシセリィのようであっただろう、と。さらにまた、シセリィの祖先達がメイフラワー号に乗ってこの国へ来ていて、彼女が、州議事堂の影の落ちる、ピーコン通りで育っていたら、シセリィは、まさに彼女(19)のようであったろう、と。」

マーサが自分をシセリィの境遇に置くばかりでなく、さらに進んでシセリィを自分の境遇に置いて、そこから、二人の人生と社会とを見直してみると、二人の間の共感(19)は深まり、マーサの社会的責任感も強まるであろう。何故なら、シセリィの祖先達は奴隷船に詰め込まれてこの国へ運ばれて来たことがはっきりと身にしみて認識され得るであろうし、仮にシセリィの祖先達が、メイフラワー号に乗って、信教の自由を求めてこの国へやって来たとしたら、マーサの祖先達は自由を奪われ、鎖につながれ、奴隷としてこの国に運ばれていたこと

になり、その子孫に及んでいる人種差別の問題は、もはや人ごとではあり得なくなる筈である。チェスナットは白人と黒人との間に、人種の相異を越えた、人間的共感が成り立つことが、人種問題解決の起点となる、と考えたのである。

〔注〕

- (1) Helen M. Chesnutt, *Charles Waddell Chesnutt* (The University of North Carolina Press, 1952), p. 21.
- (2) *Ibid.*, p. 21.
- (3) *Ibid.*, p. 21.
- (4) *Ibid.*, p. 21.
- (5) Charles W. Chesnutt, "The Web of Circumstance", *The Wife of His Youth and Other Stories of the Color Line* (The University of Michigan Press, 1972), p. 318.
- (6) *Ibid.*, p. 314.
- (7) *Ibid.*, p. 320.
- (8) *Ibid.*, p. 321.
- (9) *Ibid.*, p. 322.
- (10) *Ibid.*, p. 318.
- (11) *Ibid.*, p. 310.
- (12) *Ibid.*, pp. 311, 312.
- (13) W. E. Burghardt Du Bois, *The Souls of Black Folks* (A Fawcett Premier Book, 1961), p. 74.
- (14) Charles W. Chesnutt, "The Sherriff's Children", *The Wife of His Youth and Other Stories of the Color Line*, pp. 72, 73.
- (15) *Ibid.*, p. 76.
- (16) *Ibid.*, p. 77.
- (17) *Ibid.*, pp. 77, 78.
- (18) *Ibid.*, pp. 90, 91.
- (19) Charles W. Chesnutt, "Cicely's Dream", *The Wife of His Youth and Other Stories of the Color Line*, pp. 153, 154.